私の横浜　市民生活白書　昭和50年

横浜市企画調整局都市科学研究室編集・発行

B 6版　300頁

700円

市民生活をリアルに把握

「横浜市民が，自分たちの生活と気持ちを自分たちの言葉でつづり，自分たちの手で編集して白書をつくるとすれば，どのような内容になるであろうか。そうしたものに少しでも近づけてみたいというのが，この第四回市民生活白書の課題である」本書の「はじめに」のページは，このように書き出されている。全体を通読してからふりかえってみると，この課題は過不足なく，まことにすっきりとはたされている。私は，地域社会論，社会福祉論，社会意識論などの領域で現実的諸問題の研究に従事しているものとして，これを興味深く読んだ。そこで社会的諸事実とそれらのあいだの関連についておこなわれている指摘と分析は，採用されている方法では適切性をつよく感じさせ，獲得された成果では多くの教示を与える。ただし，一言だけ余計なことをいえば，一般市民だけで執筆し編集したとすれば，これは，こうまで手際よい仕上りを得ることは難しかったであろうとおもわれる。そのかぎりでは本書は，やはり，専門家たちの手による作品である。それが市民と生活感情のリアリティを，望みうる最高限度にとらえたところに，その価値はある。

内容をひととおり紹介しながら，感想を述べてゆこう。全体は3部から構成される。すなわち，第1部「私の横浜—市民の作文集」，第2部「横浜の私たち—市民生活の不安と自治体の課題」，第3部「横浜の10年」である。

第1部は，市民が毎日の生活のなかで横浜という街にどんなかかわりをもっているか，また，その街での生活にどんな気持ちをもっているかを書いた作文37篇から構成されている。それらは，市の広報紙をつうじて趣旨を示し募集したところ，これに応じた159編のなかから選ばれたものである。37篇は，近隣，身辺，変容，回想，発言の5つのテーマに区分される。それらはいずれも日常生活，歴史体験のリアリティの重さを感じさせ，それはときにはやりきれないほどである。学生結婚をしたのち3人の子どもをつづけて産み，親子4人が6畳1間でくらしている妻の手記がある。港のみえる丘に家をたててささやかな喜びを味わっていたところ，隣に連れこみホテルがたち港も次第にみえなくなってきたという人の手記もある。中学生，老人，労働者，医師，落語家，さまざまな人びとが書いている。その生活と生活感情が重層してゆくうちに，横浜のイメージが次第にうかびあがる。

この種の書物を評するさいに面白いという形容をつかうのはやや不適切であることはよく知っている。そのうえであえていうのであるが，本書のうちでもっとも面白いのは，この第1部である。私は，この部分を読みすすみながら，B・S・ロウントリイの『貧困—地方都市の研究』のケース記録がもっている面白さを連想した。また，ロウントリイを読むとき私がつねにおもいあわせる，J・ジョイスの『ダブリン市民たち』におさめられた各短編の面白さを連想した。地域社会についての分析や研究は，さらには，おそらくは，一般に社会的諸現実についての分析や研究は，この第1部に示されるような人びとの生活と意識とにかんするいきいきとした関心から出発をしなければならない。その生活と意識のトータリティを素材にしつつ，理論的営為がおこなわれてゆかねばなら

ない。それによって，はじめて，生産性のたかい研究が可能になる。その意味で，この部分は，本書の出発点であり，基底部分である。

第2部は，市民を対象にしておこなわれた大量観察法による各種の社会調査を主要な材料として，副題にあるように市民の生活不安と自治体の課題をあきらかにすることがめざされている。全体は3つの部分に区分される。1「市民の暮らしと気持ち」は，市民の四大不安として，物価高，老後や病気，住宅，公害・交通事故を，指摘するところからはじめる。ついで，住宅，福祉，医療などについて実態と不満を掘りさげる。そこで，学歴が相対的に低い労働者階級で住宅についての不安，日常生活の不満感がつよいこと，低所得階層，住宅困窮者などで福祉政策の充実がもっともつよく望まれていること，があきらかにされる。しかも，その部分が社会的発言の機会をもっとも利用しないのである。そこで，第1部と第2部との関係はいっぽうでは，前者のケース記録が示唆するものを，後者の大量観察が一般化するというものであるが，たほうでは，前者が生活に比較的ゆとりがある階層の声を伝え，後者は生活がそれより追いつめられている階層の欲求を代弁するというものである。

2「市民の行政への距離」は，市役所との接触の状況，行政への不信感，政党支持と脱政党化，投票をしない人たちの社会心理，住民運動などに参加する人たちの社会心理などをとりあげる。市民の3割は陳情，請願，住民集会，市民・区民相談などにより，市への訴えを試みている。発言が少ないのは，住宅困窮者，若い世代，新しく移住してきた人びとである。行政への不信感は3割が表明している。脱政党化，すなわち支持政党をもたない人びとが増加している。投票率もどちらかといえば低い。しかし，それを無関心層と呼ぶのみでは十分ではない。ケース研究は，かれらが，政治にたいする無力感と切実な関心とをないまぜにしてもっていることをあきらかにする。また，3「市民と市役所」に，人間を人間であるという理由だけで尊重する理念を示して，わが国の現状は業績主義，能力主義の人間観が支配的であり，その理念からはるかに遠いという指摘をするところからはじめている。人間を無条件に尊重する行政と住民とのありかたをどこに求めるか。さしあたって示されているのは，市民討議のもりあがりを背景にした開かれた自治体のありかたである。そのためには，討議へのあらゆる階層からの参加の保障，基本政策の作成過程への住民参加の促進，市役所の権限の分権化と現場としての区役所の役割の強化などが要請されている。

この第2部の2と3とは，数々の生活不安をかかえながら，市民が行政に，ひいては政治に，なにを求めているか，あるいは，なにを求めることを諦めているか，の分析である。その多くは，ほかの地域における調査・研究によっても部分的にはあきらかにされた事柄であるが，それらをあらためて総合して体系的に述べることで，説得力のたかい記述が提示されている。そうして，そのような市民にたいして，横浜市はどのように対応しようとしているかが，以下に述べられている。まず現在のわが国では，中央政府による地方自治の抑圧が一般化している実情が簡潔に示される。不十分な権限，少ない自主財源，不合理な超過負担，低い法人の税負担。その悪条件のもとで，横浜市はどれほどの行政努力をつみあげているか。第3部は，市民，物価，健康にはじまり，中小企業，六大事業，基地におわる全26項目での，その努力の素描である。それらのうち，各地方自治体にさきがけて横浜市がおこなったいわゆる法人の「超過課税」，横浜市学校建設公社，宅地開発要綱などにみられる工夫は，私には興味深かった。それらは，地方自治体が企業の生活破壊から住民を守る

努力としてたかく評価されるべきであろう。また再開発，六大事業，基地返還などは，現代日本の都市行政の典型的局面の例示である。

本書の全体をつうじての感想は，さしあたって，つぎの2点である。

そのひとつは，本書は，行政機構が作成した白書として，政治的中立性をもっともよく守っており，それによって認識の客観性をもっともよく保ち，市民の生活と生活感情を，そのトータリティにおいて把握することができた。これは賞讃に価する。中央政府が刊行する白書は，私が専攻する領域とかかわりが深いものでいえば，政治的中立性がしばしば守られず，それによって，分析や結論が歪曲されたり，曖昧にされたりする場合がみかけられる。もっとも知らしむべきデータをかくし，二義的なデータを羅列する例も多い。これにたいして，本書の方法はまことにフェアである。自衛隊員の募集にたいする市役所の非協力を責める市民の声にはじまり，市の行政にたいするさまざまな不信，反感，反対運動の実態にまでよく目配りをしている。それは謙虚さと自信の双方を感じさせる。このような姿勢が定着することは，行政の進歩といってよい。

いまひとつは，本書の方法は，地域社会を住民の日常生活の場として，また，地方自治体の行政努力の場としてとらえるものである。その生活と行政の接点に，住民運動が成立する。地域社会の社会学的研究に従う研究者たちは，多くの試行錯誤をかさねながら，次第にこのような方法を探りあててきた。かれらは，それによって，一，二のすぐれた研究例を産出したが，その例は十分には多くない。そのような状況において，本書は，アカデミックな研究にたいしても示唆的である。さらに私個人としては，本書においてコミュニティ概念がまったく使われていないことに関心を惹かれる。それは，コミュニティ概念を乱用して，論議をしばしば空想的なものにしてしまう，現在の地域社会論の主流にたいするてきびしい批判として読むことができる。

〈東京女子大学教授　副田義也〉

残念な"行政への遠慮"

冒頭に「横浜市民が，自分たちの生活と気持ちを自分たちの言葉でつづり，自分たちの手で編集して白書をつくるとすれば，どのような内容になるだろうか」と書かれている。続けて「少しでも近づけてみたい」と心意気を述べている。この考えにまったく賛成だ。

そこで「市民がつくったら，どんなモノになっただろうか」を私なりに想像してみた。

まず〈白書〉とは，いったい何だろうか。国の〈白書〉は有名だが，これと市民生活白書とは，要求されるポイントが，かなり異なるハズ。なぜなら，国は一人一人の市民にとって非常に遠い存在なのに，市は身近で領域も狭い。区民会議の発足などで，徐々にではあるが「ハダで感じ，ニオイのする存在」にも，なってきてるわけだ。

そして，マスコミなどを通じて，誰でも市政の動きを，ある程度詳しく把握できる状態にある。当然，国の〈白書〉のように，現状分析だけでは，市民は十分に満足しない。とくに，市政に関心の高い〈インテリ〉がこの白書の読者対象とすれば，なおさらのことである。こう考えていくと「市政解説の部分については，少なくとも，市民が判断できる材料を盛り込む」こと，つまり，問題点をはっきり提示することが，何よりも要求されるのではなかろうか。

前置きが，だいぶ長くなった。要するに，市民が白書をつくったら，きっと，市政と市民がぶつかり合ったテーマに，焦点をあてていくだろうとい